

資料紹介

叡山文庫所蔵『日記』

——享保十年四月条——

池田 晶

解題

ここに紹介する史料は、叡山文庫所蔵生源寺文書の享保十年（一七二五）四月条の『日記』である。生源寺文書は、比叡山延暦寺の東塔・西塔・横川の三塔のうち、主に西塔の執行代により作成された文書群で構成されているが生源寺文書の伝来については未詳である。なお、『日記』とは本史料を含め、三塔の執行代がそれぞれ作成した公用日記で、『月次記』・『日並記』などとも表記されている。

近世における三塔の執行代は、天台座主に管掌される比叡山延暦寺で寺内の寺務を統括した三塔の執行のもとで月番で寺務を担い、東塔・西塔を執行代、横川を別当代といい、三執行代と総称された。近世期の三執行代の権限や職掌は、未詳な部分も多いが、法印大僧都相当の僧侶が勤める役職で、

上坂本の収納所（止観院）で寺務を執っていた^①。主な職務は、延暦寺領の民政や山門外部に関する寺務で、日吉山王祭に関しては、祭礼の開始を命じる差紙を日吉神社の社司をはじめ、各所に祭礼執行の差紙を発するなど日吉山王祭の執行を統括する立場にあった。

なお、本史料には、享保十年四月十七日条に記された日吉山王祭大禰還御で山門公人と禰人足との間で発生した打擲事件の経緯が含まれている。この打擲事件を受けて、翌年の享保十一年（一七二六）の『山王御祭礼掟追加』が發布された。従来、この掟追加とそれ以前に發布された元禄十五年（一七〇二）の『山王御祭礼掟』については、その成立の契機や過程を知る史料は不明であったが、本史料によりそれらの詳細を知ることができる。

近世の日吉山王祭において、比叡山延暦寺の執行代が大き

な権限を有していながら、彼らが残した記録が日吉山王祭の研究に活用されることは稀であった。このように、本史料は、日吉山王祭の研究においては、極めて重要であることは言うまでもなく、公人の存在形態・延暦寺の寺務組織の研究史料としても、その価値は大きいといえよう。

註

- (1) 『新大津市史 別巻』大津市役所 一九六一 三七五～三七六頁

〔凡例〕

一本史料の文書名は、叡山文庫編『叡山文庫文書絵図目録』（臨川書店 一九九四）が刊行されており、これに従った。

一本文翻刻にあたっては、表記は原則として常用漢字を用いた。但し、変体仮名は現行の字体に改めたが、助詞として用いられる「者（は）而（て）江（え）茂（も）与（と）」については、そのまま用い、小さく表記した。また異体字（𪛗・𪛘字（じ）など）もそのまま用いている。

一固有名称や地名・人名は原則として原文表記に従った。

一史料の翻刻にあたり、記事中の読点を新たに付け、翻刻者が行った変更部分については、（ ）を付けて表示し、注記を付した。

一なお、虫損・破損および判読不能部分については、字数の確認できる部分は□□で示し、確認できない場合は□□で示した。

一原本の抹消・改変の部分については、判読できる場合は左側に
〃〃〃〃を付して表記した。

翻刻史料『日次記』第八十八(生源寺文書 日記 六九)

(表紙)

享保十乙巳年分

日次記第一 八十八

目

孟正朔旦ヨリ 執行代

六月廿日ニ畢ル 常樂院止鐙

四月朔日 大

一朝飯後宝乘院へ寄合、無量院住職願拳状相認候而、此方へ受取、則本住院へ相渡候忝奉存候由返事有之候也、由御内意無別条之旨奉書并拳状別記のことし、

一大慈院方手紙来ル、東叡へ願書之事院内存寄書出来候而、今朝山方来候、御院内覚寄出来候てツキ合候而一本ニいたし差合之事も候て、取捨御相談可申との事也、此院内へ存寄いま迄出来不申候間出来次第御左右可申候返答申遣之、一院内役者千葉院へ手紙遣ス、則大慈院方来候、手紙も遣候而、早々院内存寄書付被差越候へと申遣候所、相□□候申来候也、

一昨廿九日五谷学頭代中へ回章ス云、

兼而得御意候、未進百姓共吟味候事、各々御吟味候而未進相立候故、又御吟味之上子細も有之御了簡之上□事相済申候哉相滞之義も無之候得ハ珍重之至ニ存□、若不埒之筋も有之候而可被仰聞義も候ハ、四月三四日比迄之内様子御書付可被仰越候、尤是迄ニ被仰越候方も有之候へ共、各濱之様子疵と相知不申候間得御意候也、百姓方へ不埒計りにてハ無御座候、代官方ニても不埒も候ハ、何れの道ニても様子御書付可被遣候、以上、

執行代

三月廿九日

北谷 東谷 南谷 南尾 北尾

学頭代 学頭代 学頭代 学頭代 学頭代

二日

一宝積院願ニ依テ山坊弟子願實坊へ住職被仰付候、奉書到来三月廿四日書之、別記のことく□院ノ上ハ還源院ノ称号を覚と被下候との事也、

一東叡山へ願書之草案出来、院内役者方被差越候、

一大慈院を招キ西川願書ツキ合、互ニ添削せしめ候也、初夜ニ相添、

一政所理禪下山誕生會入用之装束等改受取申度との事也、則入□^用之物共書付を以受取相渡候也、

三日

一 宝積院後住入来、依御世話住職被仰付難有奉存候、為御礼参上仕候との事也、鳥目三百文持参也、

一 五谷学頭代中へ回章遣入、誕生會之差定ノ写ト会所ニ院内道、東塔・横川道等掃除可被申付候故申遣候也、

一 昨日宝乘院方手紙にて恵見院へ送り候、金三步ト永寿院殿へ送り候、金貳百疋と合毫兩毫歩返済有之落手相済者也、

四日

一 鞍馬山妙寿院入来、御当地へ用事にて罷越候ニ付、序^{（なか）}□□^{（し）}御見舞申上候との事也、申置罷歸り候、

一 濱年寄平左衛門入来、馬場町ノ喧嘩手肩平八事養生仕候所、段々輕重に赴申候由、兄弟之者注進仕候。御届申上候との事也、^間

一 東谷方未進百姓吟味之事申来候、彼谷にて徳王院ノミ様子少し有之候、余者相済候との事也、

一 南谷方ハ一兩具中ニ吟味いたし様子可申越之由也、

一 南尾方も一兩具延引之事申来ル、

一 北谷方ハ谷中吟味候処無滯義、浄泉院代官左兵衛ヲ吟味候所不埒之由申来、

一 宝積院山坊弟子へ付属之願相調候而、自分之称号ハ 宮様思召を以、還源院と御付被下候故、学頭代中申遣入、やは

り滋賀院・御留守居相勤被申候故ニ相触候也、

五日 無事

一 東叡山江御厄除御祈祷之義ニ付、後來共先格之通ニ相勤候様ニ被 仰付被下候様ニと申願書相認候而、今日大津へ差遣候也、尤西川兩院方之願也、東叡にて取持之衆中へも頼状遣候也、

六日

一 東叡へ願書并取持衆へ之書状之下書、五谷学頭代中へ相回し候也、

一 □□誕生會之差定紙拵候而、院内役者千葉院へ遣申候、尤恒例執行代方相認上せ候得共、昨日ハ書状等之用事にて取□候故、其元にて御書候而、堂々御にて□□□□様ニと相遣候也、本覚院方使僧来ル、院内ノ行用目録俗用申度由也則遣候、且又金岡ガ峯 山王ノ□願□□候間預り置申度との断也心得候故申遣候、

七日

一 千葉院方手紙来ル云、理禪養父相果申候忌服相考候処、忌卅日服百五十日にて候、忌之間ハ政所を引居申ニ哉、政所ニ居申ニ而も、入堂不仕引籠罷在相済候哉、様子先役衆へ聞合可被仰聞候、堂内ニも山王八所御鎮座之事迄ト云々、本覚院へ尋ニ遣候所先例も可有候得共、覚不申との事にて

智妙へ相尋可遊由申来候、

八日

一 先承仕智妙を服承候処、忌七日にて服ノかまい無之候、前々自證円了なと申者承仕相勤候而死去之節も忌服之かまい無之候キ取□ニ而も仕候て事相済可申との事也、

一 右智妙物語之様子を書付、千葉院へ返答ス、尤物語之通ニ候て今度も先格之通へ御申渡候様ニと申遣候也、

一 千葉院方手紙来ル云、理禅事昨夜具ニ承□^候へハ養父ニ而ハ無之継父ニ而候由、継父母ハ初ち不同居ニ候得ハ、忌服少も無之旨服忌令ニ相見候、養父と承候間、昨日之通ニ申遣候得共継父ニ而候間、又々得御意候との事也、御紙上相□

□候故申遣候、

一 二宮てうちん四張はり替出来、則宮仕正伯へ渡ス、

九日

一 還源院方使僧来ル云、御世話ニ預り願之通被仰付難有被存候、早速御礼可得御意候処、此間ハ御用ニ而在洛仕候、今日罷帰り候間、乍延引先ハ□僧御礼申入候との事也、

十日

一 中座出羽来ル云、御講談中世話仕候ニ付、骨折料被下置難有奉存候、御礼之為紙ニ而仕候との事并講席之図壹枚申付候故持参候也、相談之上如先格銀三匁遣之相模へも同断、

一 濱年寄平左衛門来ル云、馬場町平八段々慥然仕候段兄弟共申来候間、御届申上候との事、依之とくと本復候哉と相尋候処、末□農業仕候様ニハ罷成候由ニ御座候、猶本復仕候て重而可申上候との事也、

一 洛へ亀屋和泉世倅常助来ル、和泉世倅ニ而仕候、親義当春相果申候故、年始御礼等も延引仕候、後來家督私相続仕候間、少分之御用ニ而も不相替被仰付被下候様ニ奉願候との事、外郎餅三棹持参候也、

一 宝乗院方手紙来ル云、小濱志摩守殿昨日上京之由年寄共方申来候、尤紙屋藤兵衛方へも此間申付候間、定而今明日中ニ者可申越候、弥上京ニ候ハ、十四日比罷出可然候□物も兼而申付置候、衣体者直綴輪ケサニて可然候、猶追而可得御意候得共、為御心得如此ニ被下、卯月十日如件申来候故、加點遣ス、

十一日

一 宝乗院方使来ル、昨日得御意候通、志摩守殿弥上京之由京方も申来候、天氣能御差合も無之候て、十三日ニ御出被成間敷候哉、神事前ニ候間、一日もはやく罷出可遊候、若雨降ニ候て、十四日ニ罷出可申候、天氣能々長柄ハ略仕侍彦人羽織袴着用させ召連可申候、紙屋藤兵衛方へ自分ハ罷出候、又宗西方へ御出被成候哉、京にて申合、二條へハ御同

道可仕候との事也、委細相□候、大慈院之方差合無之候て、十三日ニ罷出可申候と申遣候、

一 上ノ年寄五人同道ニ而來ル云、先日御願申上候高掛り帳面等写取候ニ付、今日本書差上ケ申候、尤被 仰付候通ニ箱も出来候付、入目録等迄御願申上候、紙・筆料等先日書付差上候通ニ弥被下置候様ニ奉願候通、宜御了簡被成下候様ニ奉願候との事也、

一 濱年寄平左衛門・十兵衛兩人來ル云、馬場町平八事本復仕候故一類共申出候ニ付、猶吟味仕候而町年寄共迄相尋候処本復仕候故申候ニ付、御届申上候、兼而本復仕候て、御注進仕候様ニと被 仰渡候ニ付申上候、尤相手庄助義昨分柄農業之時節ニ御座候間。^{手錠}御赦免被成下候様ニ親類町年寄等と奉願候との事、右之段宝乗院へも申上候処御伝言被遊候、明日御相談可仕候間、左様御心得可被成との御事ニ候との事也、

一 宝乗院より手紙來ル云、馬場町平八本復之由申出候、明日相談之上申渡可然候、明朝後收納所へ御寄合可被成候との事也、加點遣ス、

一 昨晚誕生會・熨束類山上より下ル、恵性坊へ申付相改受取被申候、

一 相模今朝参り候序ニ跡ニ残りハ序ながら申上候、御講ニ人

中骨折として銀子拝領被 仰付難有奉存候、序々間敷御座候得共、御礼申上候との事也、相談之上銀子三匁遣之候也、

十二日 雨降終日也

一 御留守居・三執行代收納所へ集会、上ノ年寄五人・濱ノ年寄藤左衛門・平左衛門・十兵衛三人ヲ呼寄せ、扱馬場丁庄助・平八兩人ノ者共追放申渡候、

先庄介を呼出し手錠を赦免、喧嘩不屈殊更強法之仕様、依之追放仕候故申渡ス、尤町年寄并五人組親市兵衛・伯父彦十郎共二一所ニ召出し申渡候也、

次ニ平八を呼出し、疵本復之由申出候ニ付、今日申渡ス趣、喧嘩不屈之至ニ候、尤疵本復無之相果候て、相手庄介も死罪申付ル筈ニ候得共、本復之上ハ不及其儀候、依之双方共追放申付候故申渡ス、尤町年寄并五人組及び兄藤三郎・弟清三郎一所ニ召出し申渡候也、

右兩人共当領徘徊仕候て、町年寄五人組・親類等迄可為越度旨申渡ス、庄助ハ北へ追放、平八ハ南へ追放、尤收納所より直ニ追放いたし、五人組并町内ノ者合テ五人ツ、双方へ付候而送らせ申候、親類等付候而、送り之事堅無用ニ申付候也、申渡并衆議書等別記のことし、

一 宝乗院より手紙來ル云 永寿院様御着御祝儀申上可然御様子ニ承及候間、別紙之通相認候、御加判可被遣候、永寿院様

へ之御祝狀ニハ及申間敷 宮様へ計へ申上可然候付、如此御座候、無御別条にて御加判被遣候様ニと存候、以上、

卯月十二日

〔役人中人前ニ書狀ニハ及申間敷候故、出話役人中へハ不申入候、以上、右之通申来候故、先加判いたし遣候得共、書狀ニハ学政所代之加判有之候、ケ様之事ニモハ学政所代之加判申先格ニ候哉、不案内ニ付大慈院へ其趣相談ニ遣候、尤宝乘院方へ手紙遣し可申間存候故、御相談申ト申遣候処返答ニ御尤ニ存候、宝乘院へ手紙被遣可遊趣申来候、依之宝乘院へ申遣候者先刻ハ関東へ之書狀御認被遣候ニ付、加判遣候、ケ様之類ニモハ学政所代之加判候、先格ニ候哉、様子可得御意如此候以上と申遣候所返答ニ相見、ハ学政所之事成程御祝儀事ニ者前々令加判候、以上、申来候也、依之其分ニいたし置候、

一 拙子方大慈院へ申遣候ハ、先刻宝乘院ハ関東へ之御祝儀事相認来候間、先加判遣候得共、ケ様之類ニモハ学政所代之加判之先格ニ候哉、不案内ニ候間、宝乘院へ可申遣と存候、則宝乘院へ之手紙御御用も尤冷泉大納言殿御死去之節悔申上候節者、ハ学政所代之加判いたし候と相見候、然ハ憂ト悦ト違ひ計ニ候へハ加判も不苦事ニ候敷、右御相談之為得御意候也と申遣候、大慈院ハ返事ニ云、

御使札拜見先刻之御加判ニ付、宝乘院へ之御手紙御見せ御尤之御事ニ候、何様三執行代計ニ而も可相濟事之様ニ存候へとも、御加判故拙も其分ニいたし遣之、一往御尋被遣可遊候哉、ハ学政所代はかり候事、余り夥敷様ニ存候、御念入之御事承知仕候、拙方ニ而も差而考も不仕候様子も不案内ニ御仕候、以上、冷泉大納言殿御悔ニ連署之由、左様之事ニモ候ハ、此度も加判可有之事共存候へ共、其節不考ニ而其分ニいたし遣候哉、御心付之事故一往被仰遣候て、可然奉存候以上と申来候也、

十三日

一 濱年寄平左衛門来ル云、昨日被 仰付候通、追放之兩人南北御領内堺迄送り候而罷歸り候故、町年寄并町内之者共、昨日申ノ刻注進候間、御届申上候候、且又不埒之事仕出シ承之御上之御苦勞ニ罷成候故奉□候旨、町内之者共申候而、宜可申上□候様ニと申候との事也、

十四日

一 六ツ時出門入京山中ノ葉屋にて宝乘院・大慈院自跡追付被申候、夫方同道此間之雨天にて賀茂川橋なく三条へ廻り候而入京、常楽・大慈ハ佛工ノ宗而所へ行素絹等着用、宝乘院ハ紙屋藤兵衛所へ行支度、夫方同道にて小濱志摩守殿宅へ行ク、口上ハ御役被 仰付、此間御上着之由御苦勞なか

ら一山大衆珍重ニ奉存候由申入ル取次 千左衛門申ス。者ノ

志摩守義他出仕候、帰宅之節可申聞候との事ニ付、又申ス、山門之義ハ格別之義ニ御仕候、此已後万端御世話之義共頼上可申候、尤日光御門主志摩守殿へも御上京前山門之義万端御頼思召之由被仰□之由 御門主様被仰下候、尤此旨御上着ニて御祝儀ニ参上仕申上候様ニと被仰下候間、御在宿ニ而も御仕候て神御用申上度存候へ共、御留守居之事故申置候間、御帰宿之節、何分ニも宜御申上頼入候故、取次へ申候相□□候との事也、御祝儀として十銚壹本進上仕候故も口上ニて申入候也、中座出羽迄召連候也、十銚壹本受納也、

一二条公邊相濟、三人同道ニて三条近江屋彦兵衛方へ立寄、素絹等を脱キ、昼食等支度相濟同道ニて帰麓ス申ノ下刻ニ成申候、

十五日

一宮仕正伯方へ御神事用之らうそく三十めかけ十八丁為持遣候、例年之通也、鳥目百文神前代自分上ケ申候、

一相模方へ四十めかけらうそく四丁・式十めかけ式丁為持遣候て、又御神事之用例之通也、

一棧敷會場浄国院に棧敷入用之物共借用ニ来ル、尤別紙目錄相認来候也、

一東叡に三月九日之奉書到来、宝乘院に相廻し申候、二月廿七日ニ差遣候、火事ニ付、御棧敷之返書也、別記のことし、一本寛院に手紙来ル云、昨日御見舞申候所、御出京之由ニて不得貴意候、少々御相談申度義仕候間、夕飯後御出可被下候、尤夕飯御見舞被成候ハ、早ク御出可被下候との事也、依之夕飯後ニ参候処、勸學會執行之事本願主門悟院に何とそ来春三月執行いたし□□候へ、一會拝見仕候而閑東へ罷下り度候、若左様ニ難成候ハ、当年中ニ下向いたし可申候、来秋迄ハ得逗留不仕候、依之右之通ニ願申との事也、依之御相談申候、院内老分中并学頭代へ御相談之上本願主之願ニ候間、相調候様ニ被成可被遣候哉、願主之意趣ニ相背候も氣之毒ニ候、院内衆中無別条候て、其上三院へ御相談、東川共無別条候て、三月執行いたし可然歟と存候由、物語ニ候故、新本之礼拝講執行之□□ニ被成申間敷哉の相談もいたし候へ共、少々ノ差合ハ其分ニいたし、当会再奥之本願入之願ニ候間、とくと相談有之度との趣故相□□候故申入候、

一午ノ神事無□□神輿渡御、

十六日

一五谷学頭代中へ御相談之義有之候間、今日八ツ時生源寺へ御集来可被成候、尤各濱老分衆中一両輩宛御出候様ニ御通

達可被成候 東照講御出席之衆有之候て是又論後御出候様ニ御通し可被成様申遣候、右勸学會之相談也、

一 東照講今日執行 論題四土即離

探恵心院僧正高嶽 初講明花藏院亮辨

問者大弐亮稟 會場花徳院玄覺

一 正観院僧正随真ノ手紙来、今昼帰着仕候、然者修禅院・顕性院ノ金五十兩預り上り申候相渡申度候間、今七ツ時分、慥成人ニ銀取為持可被遣候、委細ハ其内可得御意候、道中ノ病氣ニて難儀取込、早々申遣候との事也、御紙上之趣承知等之返答書遣之候也、金子ハ勸学會料之利金ニて去辰ノ歳分也、御獵上之給り候様ニ申遣候様、今度僧正ヘ言伝被差上候也、

一 宝乗院ノ手紙来ル云、恵見院ノ返書到来相廻し候并御両院ヘ之一通も遣之候との事也、三院ノ執当被仰付候、祝儀申遣候と并拙僧と大慈院とヲ祝儀申遣候との返事也、又後刻奉書到来、三月十二日・四月三日両度申上候、早々御返答書式通也、右書状共別記のとし、

一本覚・本覚・真藏・千葉・巧安・乗實・溪廣・観樹・妙観・浄泉・喜見右十哲人八ツ時衆会、今朝回章遣候故也、扱昨日本覚院物語ヘ勸学会之事、来三月相催、本願主円悟院拜有之候様ニ可致之旨披露ス、何連も無別条然ハ此上東

川ノ執行代・別当代ヘ近日及内談、東川両院共差合も無之候哉を相尋可申様ニ議定せしめ候也、

一 右衆議之席ニ云、祭礼夜宮之節、王子宮拜殿ニ近年提燈二張と□し申候得共定り候、蠟燭之□□も無之候ニ付、三位并宮内方ノ願も有之候、二宮料之内ハ蠟燭相調遣可申候哉の事相相談候所、夜宮ノ事者二宮を本社として祭礼いたし候ヘハ、二宮料ノ毎歳四十めかけらうそく式ヲ燃供可然之旨ニ相定り候、今年ハ本覚院寄附有之候由ニ付、明年ノ燃供と申ニ令衆議候也、

一 正観院ヘ金子受取候、拙僧駈人善徳を差遣候、尤手紙并別紙印形之受取書遣之、金子五十兩受取早ヌ、

一 修禅院・顕性院ノ金五十兩差上候との書状尅通、執行代五谷学頭代ヘ連署到来、

一 御厄除御祇禱之義ニ付、修禅・青竜ノ常樂・大慈ヘ返書到来、別記のとし、

一 右返書先早速大慈院ヘ遣見せ申候处、兎角貴面ニ御相談と存由申来候、恵見院ノ返事并右返事共大慈一覽候而、被差戻候也、

一 京祇園ノ末ノ御供燃供ニ参候由ニて、式本入持参届ニ罷越候、則対面せしめ差戻し申候、宮仕光円と申者也、

一 正観院江帰着之祝儀ニ行対顔申賀、

一 相模方^ち亥下刻使来ル、夜祭渡御無御別儀相済候而、大□仕候との注進也、

十七日

一 淨国院^ち会場ニ付、赤飯一重惠贈有之候、

一 卯尅社参ス、

一 日吉御祭礼棧鋪入ヨリ大雨降、

一 丹波国神應寺晚ニ来ル、外郎餅三棹持参、

一 子尅越後・善行同道ニ而来ル云、夜中御休息之節ニ御座候得共、申上度義御座候間参上仕候対面ス、今日神御渡り之節、エ井ヤ／＼ノ内ニ無礼之者有之候、若キ者ノ制止仕候得共、却テ手向ひ仕候故、太刀ニテ鞆ゴシニ打申候処、疵ハ少々ニて候得共、血なと出申候、依之今晚ハ御当地ニ逗留仕候事ノわけ埒明可申なと申候、右ノ鳥井ノ内ニてノミニ御座候、疵ヲ蒙リ^後已被存ハ血も出候故、立除キ候而神ノ御供モ不仕候、御当院ニ逗留仕候哉と存、町々密ニ吟味仕候へ共相知レ不申候、帰り申候哉、若御役者様方へ明日ニ而も申出候半も無覺束候間、先御届申上置候、先ニ内談ニて申上候、御存知無之分ニ被遊置可被下候との事也、

十八日

一 真藏院・千葉院・巧安院・荣泉院・溪廣院・観樹院・妙観院・淨泉院・喜見院以上九人已刻集会メ云、一昨日相談い

たし候、勸学会之事三月へ取越、執行と申事、後來種々差障も出来可申事之様ニ存候間、やはり再奥之節相定之通ニ八月執行可然大切之仕を月替いたし執行不可然との事、真藏・千葉・観樹・溪廣・荣泉右之趣也、妙観・喜見・定泉も同事ニ存との事也、巧安ハ真藏へ譲り無言也、扱三月執行不宜との趣、種々云云、依之左候ハ、衆中之御所存本覺・本住へ申入、相談之上又々可得御意様申合候、

一 勸學會料世話役者東叡理性院^ち年始祝書之返礼之旨到来則披露ス、勸學會料利金五十両上り候ニ付、東叡顯性院^ち来候、書状も披露ス、尤近々返状遣之可然様も申入候也、一 宮仕惣代荅人来ル、御神事無□□相济同式度奉存候由也、一 濱藤左衛門来ル云、右之同然之届也、

一 上ノ年寄五人同道ニて来ル云、昨夜御届申上候^通、神ノ供奉ヲ壺人打候而痛候事、若キ者共ノ強法千万氣之毒ニ奉存候、尤昨夜子ノ刻迄高畑ノ地藏堂ニ手肩能有之由、子ノ刻ニ大津方駕籠ニて迎ニ参り戻り候と承候、今日ハ何之沙汰も無御座候承候様子ニ候ハ、二条へ訴可申由ニ候得ハ□公儀^ち御沙汰申候而ハ、山王之御威光も落候様ニ而、苦々敷奉存候、毎度強法無候様ニ申付候へ共、不屈之致方共ニ而御座候との申分也、依之此方^ち申候ハ神ニハ彼方^ち裁許役人付来候、神ノ者共不行儀ニ候て、裁許役人へ申聞、其

上猶不届ニ候て、其跡ニハ打申事も万一可有之候、役人へも不申候而、此方左様ニ痛事ハ甚理不尽之様ニ存候、しかし裁許役人ハ付来候得共、夫へ届候ニハ不及、駈人直ニ支配中古法ニ候哉、若無御座候ハ、弥以強法と申者ニ候へハ、彼方ハ堪忍仕間敷可申事ニ存候と申候へハ、御尤仰之通ニ仲ヶ間ニ而も申合候義ニ御座候との事也、依之先届之趣ハ承置候ト申候へハ、五人共退去申候也、

十九日

一 本覺・本住へ手紙遣ス云、此間御相談被成候、勸学會執行之義ニ付、少々得貴意度義出来申候、今日四ツ時御余晦ニ候て御入来奉□候、御差合申候ニて晩方七ツ時御出所前候、以上と申上候、

一 正観院僧正方帰麓之祝儀として浅草梅若十枚使僧ニて被惠賜候、

一 本覺・本住入来、昨日衆中相談候趣申談、兩人共尤之事ニ存候□□兩人共ニ衆中之所□と一同ニ存候得共、本願主是非不調候て、下向可有之様子ニ候故、不□止此間之通ニ申合せ、此上衆中へ所存も兩人も一同ニ候間、重々円悟院へ逗留候様ニ差留申相談、可然之由ニて退去、

一 宝乘院方手紙来ル、御相談之義御座候間、唯今御寄合可被成候との事也、追付寄合三執行代・御留守居立会之上、上

ノ年寄共不殘呼寄、紳ノ供奉打レ候者之様子承之候所、年寄共申候ハ此間戻リニ大津ヲ参り候、役人兩人作り道七兵衛方へ立寄、騒動之様子を申、役人へ此旨申通□様ニと頼候得共、七兵衛申候ハ、拙者左様之義相届候様ニ者迷惑ニ候間用捨頼候、尤騒動之義、様子もとくと不存候、此元ニ而も地頭方役人迄毎度御神事前ニハ強法不仕様ニ急度申渡も有之候、拙者ハ世人之事ニ候得ハ、祭り見物ニも罷出不申候へハ、騒動之様子不存候得共、毎歲紳ノ御供ハ六十余之世人ニて候へハ、左様騒動ニ及可申事ニ候ハ無之候、いか成わけニて候哉なと挨拶仕候而、互ニ双方之物語も有之候上届給り候事、用捨之断尤ニ候左候ハ、当地役人中月番誰ニて候哉、又此咄をいたし候与申事を役人中□届ニてハ無之物語之様ニ咄給ルましき哉ト申ニ付、か様ニ承候間、不承ニ而も無之候得ハ、成程届と申ニて無之、物語程之事ハ可致と申趣ニて町代ハ式人共戻り候由七兵衛申候、今日迄も大津方何事も不申参候、いか成行可申哉、兎角後來之為ニ御座候間、御了簡之上強法者共御支置被仰付被下候様ニ奉願候との申分也、相談之上了簡も可有之様、先々強法者共何人ニて候哉、とくと吟味書付差出し候様ニと申渡候所奉畏由ニて退散、仲ヶ間四人も先退出書付差出候上ニて、可及沙汰と申合候也、

一 無量院住職願之通、弟子顯性坊へ被 仰付、当月十一日之奉書到来候、開村之上宝乘院・大慈院へ相廻し、披見ニ入候而、本住院へ相渡ス、尤山上例之通被相廻候様ニ申遣候、一 敵王院方も同日之書状到来、政所□□貫後役之者理□事、十九日比発足いたし罷□□可申候、御世話之様泰存由、猶此上被添御心無念□□候様□□との事也、且又御厄除御祈禱之事等毎年覺之通ニ無之氣之毒ニ候、何事も堪忍第一と存候由、猶又当山顯性院・現竜院へも何との序ニ御書通可被成候、院内勝手之衆中当山ニ少ク候故、申遣候との事也、一 千葉院入来云、勸学會執行御相談之故、本覺・本住も御相談候哉との尋故、成程今日四ツ時兩人共招キ候而衆中御相談之趣申入候所、尤之義と被申候而、挨拶有之候趣と申聞候所、珍重ニ存由ニて罷帰候、

廿日

一 大猷院殿講出勤ス 論目図戒言論持記□

探正覺院前大僧正豪禅

講双敵院義伝

問慈光ノ弟子隣妙坊覺鋹

會敵王院詰真

講師双敵院当圖ニ而候へ共、三光院へ頼置候間、圖引敵王院弟子兵部へ其様申聞候所、兵部忘却候而、講師双敵院と披露ス、依之戒善院・竜城院等相談ニ而三光院を登壇ノ台点ニ候へ共、探題正覺院披露之上ハ左様ニ難成と一言被申

候故、双敵院当講勤被申候、引字も覺へ不申罷出候、様子ニて俄ニ□□觀明院方仰用して懷中登山間懸合被下候也、一 宝乘院方大膳を使ニ而三佛堂へ申来ル趣、昨日御相談申候、榊ノ供奉を打候者年寄共吟味之上申出候間、先刻方還源院・大慈院寄合相談ニ及候、貴院ニハ今日論席御出□之事^(勳カ)ニ候、論畢も間可有之候、年寄共少もはやく御仕置被仰付被下候様ニ□□昨日大概御相談申候間、今日書付をいたし候故、榊御用も無御別条候て此故可申渡候、依之大膳を以得御意候との事也、拟申渡趣之書付持参候故一見申候所、昨日相談候□□無別条候間、南谷松寿院駈人善正・戒心谷大林院駈人了善右兩人閉門、尤其谷之駈人中へ相預ケ可申旨申渡候也、論後戻リニ宝乘院へ立寄被申渡候趣等承合候、尤書付之趣も写歸り候、惣公人中へも書付を以申渡候趣等別記のこし、

一 今朝留守へ越後・善行来ル云、昨日被 仰付候義吟味仕候間御届申上候、尤委細宝乘院様へ申上置候、追付御寄合可被遊之旨ニ御座候、猶其節歸ニ可申上候先御届之為□□候との事之由、留守故申置歸り候、論後歸宅ニ而届之趣承之候、

一 申ノ刻大膳・善行・徳運同道ニ而来ル、先刻被仰渡候、閉門之義、其谷ノ之駈人并親類共ニ召寄候而、被仰渡候趣

申渡候、何連も奉畏候、依之御届申上候との事也、

一 無量院入来云、住職願之通被 仰付新有奉存、彼是御世話之様奉存候との事也、鳥目五百文持参、

一 留守江宝乘院より手紙来ル、昨日之義ニ付様子年寄中より申出候間、弥御相談可申候、今朝飯後御寄合可被成候との事也、一 作り道七兵衛明日大津へ参り候而、爰元ノ仕置之趣ヲ木村方へ物語申答也、届ニてハ無之用事有之、大津へ罷出候振ニて見舞候而、席ニ噂咄し様ニ仕ル答也、此故も今日申渡候所七兵衛奉畏之旨領掌候様・大膳・善行・徳運相届候也、

廿一日

一 社司左近来ル云、宮内申上候て御神事も首尾好相濟□□仕候、参上申上度候へ共、乍慮外是を御神事前より痛罷有候故、乍自由左近遂進上仕候との事、苧菜三枝恵送有之候也、

一 濱ノ藤左衛門来ル云、宝乘院様より御道ニ付、参上仕候處被仰候者、先日之届ニ御神事無御別条相濟目出度と申候得共、此間承候得ハ濱ノ者共かな棒ニて人を打擲之由、其方ナトニハ不存候哉との御尋候申上候ハ、曾テ不奉存候、左様御聞ニも及候て吟味可仕故申上候而罷帰リ、吟味候所成程御聞及之通、比叡辻之者人を打擲仕候故申候、依之委相尋候へハ、いつとて比叡辻ハ最後ニ渡り申候、然ルニ町人神之者三人つれニて立居申候間、下ニ居申候様ニ申候へ共、

却而悪口ナト仕、領掌不仕候間、サ、ラニて打可申覺悟仕候へハ、サ、ラヲ引取刺脇刀ニ手をかけ半引ぬき申候由、依之かな棒ニて打申候、尤見物等も様子ハ細ニ見テ居申候、右之通ニ無相違候と申、尤御前宜申上候へと申候、宝乘院様より様子吟味之上口書致させ差上候様ニ被仰渡候間、右之趣書付させ差上申候、猶御寄合も可被遊候旨被仰候、右御尋之義ニ御座候間、吟味之様子御届申上候との事也、承届之故申渡候也、

廿二日

一 宝乘院より手紙来ル、御相談之義有之候間、明朝飯後、御寄合可被成候、一 明廿三日御目付衆叡山^筋。巡見之由、從慮山寺案内申来候、左様不行可被成候以上との事也、

一 上ノ年寄五人同道ニて来ル云、昨日七兵衛事大津へ参、木村見舞候而、御当地御仕置之由物語候所、木村申候ハ、扨て御嚴重之御事ニ候、平日急度被 仰付、猶其上□□ケ様之御仕置之様子承之、御嚴重候故御申寧奉察候、拙者義も打擲ニあい候事、翌日承之驚入申候、爰元ニ而も毎日寄合等有之候、甚氣之毒ニ存候ニ付、毎日使なと遣、会所へ見舞など申入候、其元御出御物語之様子承之候上ハ、早々当地役人江も申通候様ニ可仕候なとの挨拶仕、七兵衛へ□走いたし候由、木村応対之様子ニ候て、無事ニ此上ハ納り可

申与木村^ら役人へ申通候上、彼地之様子近々細ニ申越候苦
 二七兵衛へ相談有之候由ニ仕候との事也、且又かな棒御吟
 味も可被遊候、此間被仰渡候得共、当年者不調法仕閉門被
 仰付候程之事ニ御座候、然共上坂本之者ノ外ニ者、かな棒
 ニ而打擲之事も無御座候間、かな棒御改之義者何とそ明年
 へ御延させ被下候様ニも奉願候、右御仕置被仰付候程之大
 事仕、大騒動ニも及駈人中ニも迷惑仕罷有候間、何とそか
 な棒御改之義者、明年^迄御延引被下候様ニ仕度との願也、
 猶又かな棒之事社家并下坂本共ニ已前ハ無之、上坂本ニて
 も纔なしてハ無御座候所、近年段々多罷成候、其上人ヲ痛
 候事強法之至ニ奉存候へハ、御吟味之義者、御尤千万ニ奉
 存候得共、上坂本之分ハ今年御吟味之事偏ニ御延引奉願と
 の事也、かな棒持候事ハ警固ノ為ニ候所、強法二人を打擲
 候様ニて者急度吟味不仕候而者不宜候得共、願之筋とて寄
 合之上相談次第ニ可申渡旨申聞候所、奉畏由ニて退出也、
 一善左衛門耳送り□起り候ニ付、八瀬ノ釜風呂へ罷越度由、
 願之通今日差遣候也、

廿三日

一朝飯後、宝乗院へ寄合、濱年寄藤左衛門・平左衛門・十兵
 衛を召シ申渡候趣者此間申渡候、比叡辻ノ者かな棒ニて人
 を打候事、口上書差出候通ニ候得ハ、一往相聞候様ノ事ニ
 候へ共、追而可申渡筋も候間、先かな棒年寄方へ取上ケ預
 り置候様ニと申渡候、尤比叡辻ノ者へ申渡趣、別紙書付年
 寄共ハ遣候而、此故口上ニて申渡候様ニ被申付候処奉畏と
 の事也、別紙申渡候書付并年寄共^ら差出し候、口上書并当
 年警固ニ罷出候、人名及び下坂本中ニてかな棒所持之人
 名・かな棒之数書付等別記のことし、

一席ニ申渡ス、神宝藏之屋祢瓦を礫ニて卅枚計り打割り申候、
 宮仕共へ吟味申付候得共、いつの間ニ仕候も不存由申候、
 定而木の葉かきのわけ屋共の仕業と存候間、向後ケ様悪敷
 業不仕様ニ候念入可申渡候、此後見付次第召捕候而、急度
 仕置申付ル覚悟ニ候、幼稚之童子ノ可致事ニてハ無之候、
 十歳已後ノ者ニて半召捕候ハ、親兄弟迄も急度科分可申
 渡候、御修理所義尤大切之事ニ候、猶其外制札など迄石ニ
 てたゝき不屈之至ニ候、此等之義共向後堅不仕様ニ可申渡
 候相背候て、曲事ニ申付、若見付不申共不屈之事有之候て、
 堅ク山へ立入候事無用ニ申渡覚悟候間、念入急度可申渡旨
 申聞候、

一上年寄五人召寄候而、是又右之趣急度相触候様ニ申渡候也、

一濱年寄共ノ云、昨廿二日田中蓮正寺開帳首尾好相支舞帰麓仕候間、御届^申上候との事也、

一上年寄共之云、大津木村方より道七兵衛方へ内証にて使を差越申聞候ハ打レ候、素襖着之者ハ大津寺内と申所之者にて候、此寺内と申ハ大津町支配ニ而も三井寺支配にて無之候、大坂ノ建長寺と申寺之支配下にて大津之内なからも別段之所にて御座候、此寺内之者を大津坂本町ト申町より雇候而出し申候、依之今度大津ニても段々吟味□有之候所元来禰を坂本へ渡し候時、四ノ宮へ禰付之役人共悉相集候而、目付罷出無礼無之神妙ニ供奉仕候様ニと申付候事、恒例ニ候、今年も能々申渡候而差越候所無礼仕候而、打擲ニあい候故、打レ候者之不覚悟と申定り候、依之寺内ノ者共より不調法と申誤り一札を相認候而、坂本町ト之差出候ニ付坂本町より役所へ差出候由、役所ノ沙汰畢竟ノ納り方ハ不相知候へ共、先大概右之様子ニ候、大方穩便ニ納り可申候哉と申越候由、七兵衛物語仕候との事也、尤又々近日ニ七兵衛木村方へ罷越、細ニ様子可承旨申候事、穩便ニ納り候て閉門之者共も御免可被下候、時分柄農業之節難儀仕候事との申分也、

一濱井上ノ年寄共退出之後相談、作り道七兵衛□公人にて数度大津へ往還苦年之事ニ候事穩便ニ相濟候て、骨折料百足

遣し可然と申ニ定候也、

一かな棒吟味之事者、来年祭礼前ニ至り候而、相談之上捧持幾人なと申事相定可申旨申合候也、

一留守へ正観院入来、先日者早々預御出忝存候、不慥平復候間罷出候ニ付、御礼旁御見舞申入候との事也、

一今朝百日目付登山之事、山へ申上候と晚来徳運来ル云、御目付御登山之由ニ付、致登山候所今日ハ御登山無之候、為御届参上との事也、

廿四日

一越後・徳運来ル云、四宮社家木村方より手紙を以作り道七兵衛へ申越候、則手紙御目ニかけ候手紙ニ云

以手紙致啓上候、先日ハ預御尋来久々ニ而□御対顔不淺大口此御事ニ御仕候、併何之風情も無之、其上早々御立御残念之至ニ存候、然者被仰聞候趣、則爰元御立之同日ニ役人方へ申達候、何も御念入候御儀与御報ニ承候、委細之儀ハ書面難申上之候得ハ、家頼平八口上ニ可有御仕候間、乍慮外御聞可被下候、乍序其元何茂御年寄中江も御参会之砌可然様ニ御心得別而可尋候、以上、

滋賀信濃守

卯月廿四日

神坂七兵衛様

扱家頼口上ハ寺内ノ疵蒙り候者^レ不調法仕候と申証文仕、坂本町と申之差出し、坂本丁^ノ役所へ証文仕差出候而、事穩便ニ相済申候、尤与力衆迄ハ訴有之御聞候得共、夫^レ上ノ御沙汰ニハ不及申相済候、与力衆迄も諸役人中^ニわけ能申入候由故、穩便ニ相済候ト申趣ニ御座候との届也、宝乘院様御伝言^ニ而御座候、先相納り珍重ニ御座候、当地閉門之者も願出候て、御相談之上赦免申付候様^ニ茂可仕候との御事ニ御座候候との事也、時分柄茶・麦植付等之節ニ御座候間、閉門之義、早速御免奉願之由兩人申候故、相談之上可申付故申渡候也、

廿五日

一本住院入来云、此間円悟院へ参候而勸学會執行之事、来春奥行申度相談いたし候へ共、種々差合共有之、別而執行代来春参府番ニ候へハ、旁以執行申難候間、何にて来秋□御逗留候様ニいたし度候、惣衆中共此義ハ幾度も参り候而、御逗留一会御拝見候様ニいたし可申覚悟ニ候と、段々い□わ□演説候所、逗留も可有之様子ニ候間、此上猶老分衆中二三輩御越候而、逗留有之候様ニいたし、可然之由物語也、相□□様申入候、其内拙子も見舞候而、逗留有之候様ニ可申入候、尤之事と申候て退去、

一相模・越後・大膳・徳運四人同道にて来、大津榑ノ供奉も

一坊相済候間、閉門之兩人御赦免之事、十六谷^并公人親類共一同ニ奉願候、殊更植付耕作之節ニ御座候間、何分ニも御願申上度候、一同もはやく御赦免被下候て、難有可奉存候との事也、相談之上可申渡候様申聞候、

一宝乘院^ノ手紙来ル云、過刻年寄共相廻り、閉門之駈人赦免之義願出申候、尤大津穩便ニ事済支置一通り申付候上者、耕作時分ニも候間、差免可然存候、少々軽重も候へ共、時分柄之事ニ候間、願之通同時ニ赦免ニも可然候、寄合相談ニも及間敷哉と存候、御別条無御座候て、還源院ニも申達、明日赦免可申渡候、若又相受義も御座候て可被仰聞候、以上との事也、

右之趣ニ候故依願直ニ赦免候而ハ、唯大津へ之聞計り候様ニ而候へハ、向後之為ニも宜有之間敷候、今一往も願わせ候上にて二三日延引之上赦免可然歟、尤廿日ニ閉門申渡、明日迄にて一七日之内支置申付候へハ、日数も能候間赦免申候可然にて候へ共、向後之為ニハ今二三日も延引之上赦免可然様ニ存候旨、大慈院へ手紙にて申遣候所返答御尤ニ奉存候、農業之時節ニ候間、早速赦免可然之旨申来候間、其分にて赦免申付候、依之宝乘院ハ手紙ニ加點遣候也、

一作り道七兵衛来ル云、此間大津へ参り、世話彼是と仕候ニ

付、骨折と思召、御一山^ら御目錄被下置難有奉存候、尤年寄中迄ハ宜様被仰上被下候様ニと申入候得共、猶又御免所迄御礼ニ伺而仕候間、御序之節宜御申上奉頼候由、申置罷歸り候、相談之上金百足遣候也、

一 初夜時宝乘院^ら手紙来ル云、明日西坂筋へ御幸之由京^ら被帰候、衆中慥ニ承被参候由、西谷^ら為知申来候、此度ハ所司代^ら人留高札も不参候、今晚之事ニ候間、惣而山中人留相触候ニハ及申間敷候、乍然雲母坂口へハ番人差置人留申付候ハ、可然と存候、谷々江^ら為心得明朝相知せ可申候儀之事、沙汰ニ而承候間、山中惣人留ニハ及申間敷候、千年堂之辻ニ番人ハ可申付候間、左様御心得可被成候、右為可得御意如此御座候、以上、卯月廿五日□□相受御了簡も御座候て可被仰聞候、以上との事也、加點遣之、

廿六日

一大膳・徳運来ル云、御願申上候通、閉門之兩人早速御赦免被仰付、何連も難有奉存候、為御礼参上仕候との事也、

一 山へ回章ス、今日西坂筋へ御幸之由ニ候、此度者所司代^ら不申来人留之高札も不参候得共、御心得之為申入候、例之通ニ不申来候間、人留之事申触候ニハ及間敷候得共、山上ニ罷有候、下郡へハいつもの通御申渡可然候旨を申遣候也、猶又勸學會科利金五十両上り候ニ付、書状到来候故、此返

書相認、学頭代之加判取ニ遣候、勸善院事先比普門院^ら彼院へ□住之事ニ候間、祝書遣し可然事故、是又相認候而、学頭代之加判取ニ遣し候也、勸學會料世話役者之内故也、一 敵主・青竜・修禪・顯性・現竜・泉竜へ遣候書状など相認申候也、御厄除一件之事或勸學會料世話并利金落手之事、一 札申遣候用共也、

一 無量院・籠山御札、昨廿五日ニて為出界、京川原御里坊^々空へ□参候而、昨晚帰麓有之候由^今。昼時入来物語ニて候、追付進具結夏仕候との事也、中安居結び被申候也、名を同空と改候との事也、

一 山へ加判取ニ遣候所、日暮判形相済来ル、

廿七日

一 東叡山へ之書状等相認候而長円方へ遣ス、相模屋へ遣候様ニと申付遣候也、

一 正観院へ使僧を以申遣而ハ諸山学頭□□衆悦此事御座候、依之為申賀金貳百足衆中^ら進上有之候、猶拙僧^ら宜相心得申遣候様ニとの事御座候との趣ニて申遣候也、

一 播州五山惣代班鳩寺ノ円光院・増位山ノ安城院兩人来ル、於国元出入之義出来、依之罷上り御届申上候、訴書者宝乘院へ差出置申候、乍御苦劳御参会之節、御聞届可被下候との事也、金百足持参候、

一 宝乗院^〆手紙来ル云、播州増位斑鳩等之五山^〆願之義申出候ニ付、御相談なし候間、明朝飯後御寄合可被成候、以上の事、加點遣之、

廿八日

一 四人例之通寄合、扱播州^{五山ハ増位法花斑鳩普光寺正明寺也、}
之事ニ候故、相談之上願書等写候而、委細^{二東鑑立}申遣候、尤書状相認加判相済、扱東叡^〆御返簡到来迄ハ間も可有之候条、先播州^〆来候、両僧ハ差戻し可然ニ申、相談ニ相究候、尤今日申渡答也、右願書等并東叡^〆遣し書状ハ別記のとし、
一 右相談後大慈院へ立寄候故麦飯被申付候故□申候也、留守□正観院^〆使僧来云、談山□□被仰付候ニ付、院内惣中^〆為御祝儀方金貳百疋被送下忝仕合ニ候、衆中へも宜御礼頼入候、右為御礼如此御座候、尤□□御礼可申伸義候得共、此間入洛仕やうくと昨晚罷帰候而取□罷有候故、乍略義先以□僧御礼如此ニ候との趣也、

一 留守へ播州^〆之願僧兩人来ル云、願之趣御聞届被下忝奉存候、尤関東へも被仰遣候故御世話御苦勞之至難有奉存候、先国元へ罷下り居候様ニと被仰渡、重て忝仕合ニ奉存候□□御礼等之為ニ参上仕候、尤明朝発足仕下向候との事也、
一 宝乗院^〆手紙来ル、今朝ハ御苦勞ニ奉存候、又関東^〆奉書到来御相談之義御座候間、七ツ時過御寄合可被成候との事

也、夕飯後大慈院^〆直ニ同道ニ候奉書之趣ハ、若君様向後大納言様と可奉称旨被仰出候間、其旨を存触下有之面々

ハ不殘可相達候との公儀^〆之御書付之写并奉書到来也、

尤^{奉書等}別記のとし、扱相談ハ二条へ御祝儀ニ罷出候事い

可改候哉と
か、〇申事也、無用ニ定之山下山上へ右之趣相触候筈也、

扱直ニ奉書之返簡も相認加判相済候也、次ニ

一 東叡^〆還源院へ奉書来ル、其中ニ坊珠大納言殿参府之御門主様へ御願候ハ、京都草堂行願寺事所宮衣御免ニ候迎之御事ニ表宮衣御免被下候様ニ□清一分ニて奉願との趣也、依之当山へ御尋差障りも無之候て御免も可被遊為思召候ニ候間、執行代中へ相尋候而申越候様ニとの趣也、則右奉書還源院^〆仲ヶ間へ被見候ニ付、三人相談之上存寄書付候而還源院へ遣之候、奉書□并存寄書付等別記のとし、

廿九日

一 山へ回章ス若君様を大納言様と可奉称旨被仰出候趣并正観院^〆祝儀之返礼申来候趣、右両条申触候也、

一 宝乗院^〆手紙来ル云、昨日御物語申行願寺一件ニ付別紙之通申遣可然ニ付書付申候、昨日之書付之内、第二条之次へ入、第三ノヶ条ニ仕可然候、無御別条ニて書入遣可申候、以上、卯月廿九日

□□初にカラ三ツ目奥カラ式つ目へ入可申候、

別紙ニ書付差越被申候ニ付、披見之上加點いたし遣候、

一昨日之寄合ニ宝乘院ノ云、西坂不動石之邊ハ先年ハ林丘寺之宮ト西谷と諍論之所ニて候、其以後 宮之御方ハ竹木少々ニ而も材候節者西谷之案内有之、双方得心之上ニ切申事と然ルニ近キ比無案内ニ竹木夥數 宮之御方ハ切取ニ付、西谷ハ付届いたし候ヘハ、返答ニ我俣之申分有之、二條邊ヘ成共訴申度候て、訴出被申候ヘなと、有之候由、畢竟ハ山門領ニ而候ヘ共、已然ハ西谷掛リニ罷成有之候故、常□彼谷ハ万端取捌いたし来候、依之此度も又彼方ハ諍論仕事ニ候、自然公邊之沙汰ニ及尋有之候共、山門領ニ而候ヘ共、

西谷境内ニて万事西谷ハ常々世話いたし候間、委細彼谷ヘ御尋有之候様ニとの御挨拶有之度候間、左様御心得置可被下候、不動石と申ハ四峯行者之拜所之一ヶ所ニて候由也、

卅日

一長門来ル、五月八日嚴有院殿講□□銀持参候也、
銀四百九十匁匁六厘匁合と有、此銀受取置候也、

〔付記〕

今回、史料の閲覧・複写・翻刻に関して、叡山文庫長山田能裕様、文庫職員村上良章様・曾我理恵様のご高配を得ました。記して謝意を表します。